

アトリエ 琉游舎 だより 130号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

2022年5月4日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

八十八夜の別れ霜

- 立春の日から88日目を八十八夜と言います。今年は5月2日です。二十四節気では把握しきれない季節の変化を補填するためのものとして言いならわされてきた雑節のひとつです。二十四節気は中国で作られた暦なので、日本の風土に合った農業独自の暦が必要だったのです。
- 季節の変わり目を的確につかむことが、農作業にとってはとても大切なことです。その変化を掴み損ねると農作物に多大な被害が出ます。自然現象と農作物との深い関係が雑節となり「八十八夜の別れ霜」という言葉で伝えられてきました。雑節は天気予報だったのですね。
- 朝晩の冷え込みもなくなり、季節は春。八十八夜のこの頃は比較的穏やかで天候も安定します。もう霜も降りないだろうと思っていたその年の最後におりる霜のことを「別れ霜」といい、ちょうど八十八夜の頃にあたります。別れ霜がすめば、その後農作業に取り掛かることができます。ところが万が一でもその後におりる霜があると農作物は大きな被害を受けます。これを「八十八夜の泣き霜」と言います。農家にとっては泣くに泣けない痛恨の霜です。冬の名残の霜にきっぱりと引導を渡し、夏にバトンを渡す節目の日が八十八夜だったようです。
- 昨年私は八十八夜の泣き霜を身を以て体験しました。連休中の4日に植えたキュウリの苗が一週間後に霜にやられてしまったのです。4本あるうちの1本がダメになってしまいました。別れ霜の時候は過ぎていたはずですが、泣き霜への準備と心構えを怠ったための結果です。
- 季節は行ったり来たりしながら少しずつ変化して、気がつけばいつの間にか入れ替わっているもの、と理解していても季節が戻ることの対応はついおろそかになってしまいます。痛い目に合わないとは対処を怠るようです。キュウリの苗1本の犠牲のお陰でこの一年は秋の早霜も冬の霜柱対策も、夏と秋の虫、冬の鳥対策も最近是用意周到万全を期しています。ひたすら抜くだけの雑草対策以外は、学習の成果が着々と結果に表れることは嬉しいものです。
- どれだけ彼らは痛い目に遭い続けてきたのだろうか。その苦難の歴史が未だにそのまま現実であることに驚きと哀しみを禁じ得ない。彼らはこの侵略の顛末がどうなるろうとも、新たな蹂躪に備えて、さらに堅固で長期避難に耐えられるシェルターを持つことになるのだろうか。
- 地上の建造物の下のこの必要不可欠な隠れ家は、幾たびも戦火にさらされた国土の学習成果であるはずなのに、そこは安楽ではなく悲哀と苦痛を身を以て知る場所。人は自然と折り合い共棲はできても、人と人との共棲は不可能なのだと言うことを私たちに突きつける場所。

読書会

5月10日24日
(火)13時半

5月からは法華経を読みます。2回目の法華経読書会です。分かり易く楽しい会です。資料はすべてご用意いたします。皆さんの参加をお待ちしています。

写経会

6月5日(日)
13時半

映画会

不定期の開催となり
ご迷惑をおかけします

5月5日12日19日の映画会はお休みします

5/26 木	13時半	南部に轟く太鼓(86分)	ジェイムズ・グレイク主演。南北戦争で両軍に分かれて戦う友人のグレイとウィル。デビル山の攻防でついに二人は直接中を向け合うことになるが、
6/2 木	13時半	大いなる遺産 (118分)	ディケンズ原作。孤児であった主人公ピップがその生い立ちから青年時代までを語る文豪ディケンズの作品。

狂言綺語…汎宗教者

あなたが無人島に持って行く一冊の本は何ですか？との問いを耳にすることがあります。最近では歎異抄がその一冊とよくききますが、30分もあれば読了してしまうのが難点です。船の迎えが来るまでに気の遠くなるような回数を読み続けなければなりません。一緒に過ごす本としてはあまりにも短すぎます。私ならば第一候補は妙法蓮華経です。朝勤で毎日読経しているので無人島でも日課通りに過ごすことができます。第2候補は読まなければならないと思いながら、今まで通りの信行の日々が続いたら一生読むことがないだろうと思われる道元の「正法眼蔵」とダンテの「神曲」です。どちらの書物も理解を超えて魂が取り籠められてしまうのではという本能的な恐れが、私をその書物から遠ざけていたのです。が、もし鬼界が島に一人取り残された俊寛と同じ運命にあるのであれば、生死一如を共にする書物としてはこれ以上ふさわしい書物はないと思われるからです。

「正法眼蔵」は仏教思想書です。仏教は生死についての思想です。私の浅薄な理解では道元の死生観は生死一如の絶対浄土を自身の中に現前させる思想です。そのために私たちは世界をどのように捉えその中でどのように信行するかをとことん内省した哲学書です。同じ法華経の世界観から始まっても、日蓮は社会の中で絶対浄土の実現を希求した実践者であったのに対して、道元はそれを自身の内なる宇宙の中に実現しようとした哲学者です。日蓮の弟子として社会実践者の道を歩む私が無人島に置き去りにされては実践のしようがありません。無人島では私の信行は自分の心の中に浄土を観ることが目的となってしまいます。行なき自分だけの浄土に果たして安らぎはあるのか、そこは浄土を騙る地獄なのではないか、という恐れが常に私にはつきまとうのです。

「神曲」は断片も囓ったことはないので辞書類の受け売りです。「中世カトリック的世界観による救済と永遠のいのちを追求したもので、理性を象徴するウェルギリウスから地獄を見せられ、次に罪を浄める煉獄を訪れ、最後にベアトリーチェに従って天国に昇り三位一体の神の姿を見るにいたる壮大な叙事詩。中世ヨーロッパのキリスト教世界観の集大成といわれる文学作品」です。宗教は人間から死の恐怖を除くことが大きな役割です。生前の罪を浄化し浄土（天国）に至るという考え方は現実の生と死後の永遠の生命の存続を見据えることで死への恐れを軽減しようとする、仏教にもキリスト教にも共通する人間の本質的な欲求です。私は常々狂言綺語の場で西洋合理主義の精神的基礎をなすキリスト教世界観を仏教のありのままの世界観と対比し、二元論が基調をなすこの社会の中で、仏教の一如・不二の信行をし続けることは可能かを自問自省し続けてきました。同じ永遠の生命の希求から始まったキリスト教と仏教が、全く異なる世界観を導き出すという宗教の不思議。

その秘密に触れる危険な感覚は無人島で一人にならないと解消できないかも知れません。ダンテを天国に導くベアトリーチェは彼の終生の理想の女性であったという事実と、神曲が「死をよく知ることが生をよく知ることである」として書かれたものだとすれば、それは法華経の死生観と一にするものです。無人島では法華経と神曲の両立を実現するか、どちらかの一方が飲み込まれてしまうのか、いずれ読むべき書が神曲なのでしょう。

永遠の生命という言葉には曖昧性がつきまとうので、ここで少し整理したいと思います。永遠の生命は死への恐怖から逃れるためにこの生命がどのような形で存続可能かを思い巡らしてきた考え方です。例えば仙人が不老不死の仙薬を作り出そうとして努力したり、一度は死んでもミイラとして肉体を保存すればまた生き返るなどの肉体的生命を存続させられるという考え方が一つ。肉体死から解放された靈魂が死後も永遠に存続するという靈魂不滅説が一つ。この考えは死の恐怖を和らげ生命存続の欲求を靈魂という形で満たされることで、多くの宗教に見られるものです。そして私が「永遠のいのち」と表記するものが一つ。これは諸行無常、生滅・変化する現実相の中で今この瞬間につかむ永遠の生命のことです。この生命は自分だけの生命ではなく宇宙の全存在のいのちを今この瞬間に感得し、自分もその一部であることを喜び、その喜び（いのち）を永遠の今に繋ぐことです。それは個体の生命ではなく大いなるもの（神、仏、自然、宇宙）と一体化したいのちです。私自身の肉体の生（現実世界の生命）が「良く生き良く死に」行くことは、永遠のいのちを私以外の生命に繋ぐことなのです。そこに死の恐怖はどこにもありません。ただ今この瞬間に生きる喜びを感得するだけです。私は仏教は生死についての思想であると書きましたが、厳密に言えば「死を正しく（ありのままに）観ることで生きることの喜びを受け取る」思想です。法華経が説く教えの基本は誰もが仏になり得るということです。それは久遠実成の釈迦牟尼仏（永遠のいのち）と私たち衆生が一身一心になることであり、私たち自身も永遠のいのちのひとつであることを実感することです。仏教の教えは「生きる喜び」の教えです。私は法華経を娑婆世界に生きる人々への応援の教えであり生きる賛歌だと考えます。宗教は死者のためのものではありません。いかなる宗教も生きている人の喜びと安楽のためにこそ存在意義があるのです。神曲も正法眼蔵も歎異抄も生きる喜びを伝えるために書かれたものです。その喜びをどうやって掴むかのためにキリストや久遠実成の釈迦牟尼仏や阿弥陀如来が、天国や極楽浄土や常寂光土や地獄を、私たちの一瞬にして永遠の今に立ちあがらせるのです。

私は地獄に対置するところを「安らぎの処」と表記しています。涅槃や悟りの世界です。これは宗教によって表現が異なります。キリスト教は天国（heaven）、念仏の徒は極楽浄土、法華経の徒は常寂光土です。私にはどれも同じ安らぎの処です。地獄はみな同一の表記で通じるのに、正反対の場所にいろいろな表記があるのは何故でしょう。行きたくない処（地獄）は共通でも行きたい処（安らぎの処）は人それぞれ 琉游舎：戸井 出琉・恭子
れだということかも知れません。私は特定の宗教に関わることで安らぎの処を 問い合わせ：0287-53-7848 08033508152
見失うくらいなら、無宗教でいた方が良くと思っている宗教者です。それは 矢板市大槻2319-17コリーナ矢板C-850
各各が見出した「信」こそが自身の宗教と考える汎宗教者でもあるということです。メール：toi10lizuru@outlook.jp